
表裏

< 琢 >

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表裏

【Nコード】

N2349B

【作者名】

<琢>

【あらすじ】

白髪・赤眼という異形の姿で生まれ、同じ年代の子供に捨てられ、親にさえ捨てられた鈴宮武也と周囲の人々の変化を描いた物語。

< 第一話 >

2017年

刹那に過ぎ去りし過去を追う者、追憶の魔術師…です。

2010年

白髪鬼、赤眼の子、呪われた子、化け物とか妖怪なんて呼ばれるのにはもう慣れた。

声は失った。感情も失った。でも両親の前では有るかのように振舞うことはできる。

今以上に嫌われないように。

でも、とうとう僕は見捨てられた。いつもと同じなんの変化も無かった昼食の後、母さんが洗い物をしながら、僕を決して見ないように別れの言葉を告げた。

「武也。武也は明日からおじいちゃんの家に住むことになったから準備しなさい。」

「僕だけ？お母さんは？」返事の言葉はわかっていたのに幼いが故に期待を持ってしまった。

「武也だけよ。おじいちゃんが武也だけをつれて来てって言ったの。」

母さんは僕の期待をあつさりと打ち消し適当なことを言っただけで誤魔化した。

まだ5歳だった僕は母さんの言葉が嘘だとわかっていても抵抗する手段が無かった。

1つだけ。本当にたった1つだけ心残りがあってどうにかしようと考えたが、翌日母さんと父さんによって爺ちゃんの家へと連れて行かれた。

爺さんの住んでいる村にはお年寄りばかりで子供は一人もいないか

らもういじめられることは無いのだと移動の車の中で母さんが言い訳のように僕に言った。

僕は黙って外の景色を見ていたが次第に睡魔に襲われ眠ってしまった。

目が覚めた時には、すでに母さんと父さんの姿は無く僕を顔を覗き込んでいるじいちゃんが居るだけだった。

「起きたか？武？」

「…うん。お母さんたちは…居ない…よね…」

「そうだな。」爺ちゃんは静かに言った。

「今日からは私が親だ。よろしくな武。」爺ちゃんは子供のように笑いながら言った。

「うん。」

僕はその後爺ちゃんから様々な事を聴かされた。

多くのどうでもいい話や、ここが霊山のふもとであること・勉強は爺ちゃんが教えるということ・そして自分が魔術の類を使えるということ・それを僕に教えるということ。

「僕に魔法を教えてくれるの？」

「ああ。教えるのは魔術だけだな。今お前が声を出せるのもお前が寝ている間にかけて魔術の御蔭だ。」

そのときようやく声を出せるようになっていたことに気づいた。

僕は魔法と魔術の違いを聞いたが、私にもわからない。ただ、私の力が魔法でないことはわかる。何故かはわからんが…。と少し恥ずかしそうに教えてくれた。

それから七年間はずっと勉強と魔術と体術に生活の大部分を費やした。

2017年

「武。」

いつもと変わらない夕食の後、爺ちゃんは少し躊躇ったような声で僕の名を呼んだ。

「はい。」

爺ちゃんの声に僅かな動揺があつたので僕は大いに驚いた。
なにせ七年の間一度も爺ちゃんが僅かにでも動揺した声を聞いたこととも、表情を見たことも無かつたのだから。

八歳・魔術のミスで霊山の一部が焼失。

九歳・またも魔術のミスで家屋の七割を破壊。

さらにそれを直すための魔術にも失敗し結果全壊。

十一歳・霊山で熊と野犬に襲われ重傷の状態で帰宅。

これだけのことがあつたにもかかわらず爺ちゃんは「何とかなる」の一言で全てを片付けてしまっていた。

「そろそろ通り名を考えようか。」

魔術師は他の魔術師からの呪詛を避けるために自分の名を隠すための通り名を付ける必要があると以前教えられていた。そして、通り名の意味と爺ちゃんの通り名を聞いた時からずっと自分の通り名は考えていて最近やつと考えがまとまったところだった。

「はい。お爺さん。…実はもう考えてあるのです。」

「そうか。どんな通り名だ？」

大いなる時の一欠片を生きる者、刹那の魔術師。それが爺ちゃんの通り名だった。

その名の一部を貰い自分にこの名を付けた。

「刹那に過ぎ去りし過去を追う者、追憶の魔術師…です。」

「過去、そして…追憶…か…」

爺ちゃんは少し悲しそうな顔をしてそう呟いた。

「駄目…でしょうか？」

不安になり爺ちゃんにそう聞いたが、爺ちゃんは笑って「いや、良い名だよ。武。」と言ってくれた。

「突然だが武。お前にはここから出て行ってもらう。」

確かに突然だった。まさか爺ちゃんにまで捨てられるなんて全く思っていなかった。目の前が真っ白になり僕は気を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349b/>

表裏

2010年10月10日01時55分発行